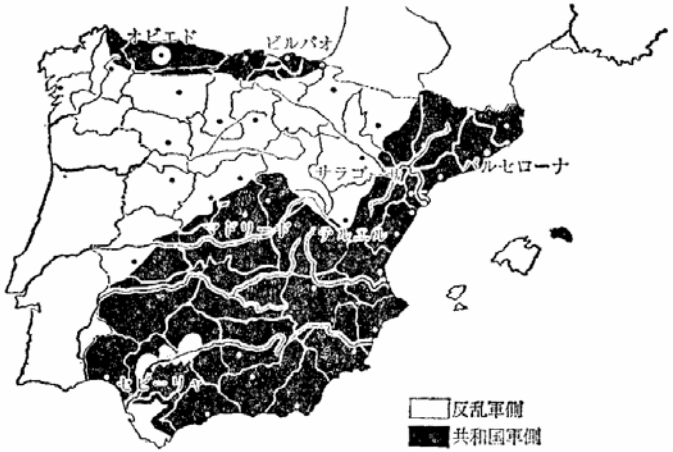
スペイン内戦

1. クーデタの失敗と内戦の勃発
2. 両陣営における戦争体制の構築
3. 1936年10月～1937年3月――マドリード攻防戦
4. 1937年4月～1938年4月――長期戦・消耗戦
5. ネグリン政府
6. フランコの新国家
7. 1938年5月～11月――共和国側の抵抗
8. 1938年12月～1939年4月――スペイン内戦の終結

〔邦語主要参考文献〕

- 若松隆『内戦への道――スペイン第二共和国政治史研究』(未来社、1986年)
- M.S.アレグザンダー、H.グラハム(山口正之監訳)『フランスとスペインの人民戦線』(大阪経済法科大学出版部、1994年)
- 斉藤孝編『スペイン内戦の研究』(中央公論社、1979年)
- P.ヴィラール(立石博高・中塚次郎訳)『スペイン内戦』(文庫クセジュ、白水社、1993年)
- H.トマス(都築忠七訳)『スペイン市民戦争』(みすず書房、1988年)
- G.ジャクソン(斉藤孝監修・宮下嶺夫訳)『図説スペイン内戦』(彩流社、1986年)
- S.G.ペイン(山内明訳)『スペイン革命史』(平凡社、1974年)
- B.ボロテン(渡利三郎訳)『スペイン革命――全歴史』(晶文社、1991年)
- スペイン史学会編『スペイン内戦と国際政治』(彩流社、1990年)
- S.G.ペイン(小箕俊介訳)『ファランヘ党』(れんが書房新社、1982年)
- H.M.エンツェンスベルガー(野村修訳)『スペインの短い夏』(晶文社、1973年)
- M.サイドマン(向井喜典訳者代表)『労働に反抗する労働者』(大阪経済法科大学出版部、1998年)
- E.H.カー(富田武訳)『コミンテルンとスペイン内戦』(岩波書店、1985年)
- ロバート・キャパ『スペイン内戦』(岩波書店、2000年)

戦　局①（1936年7月）

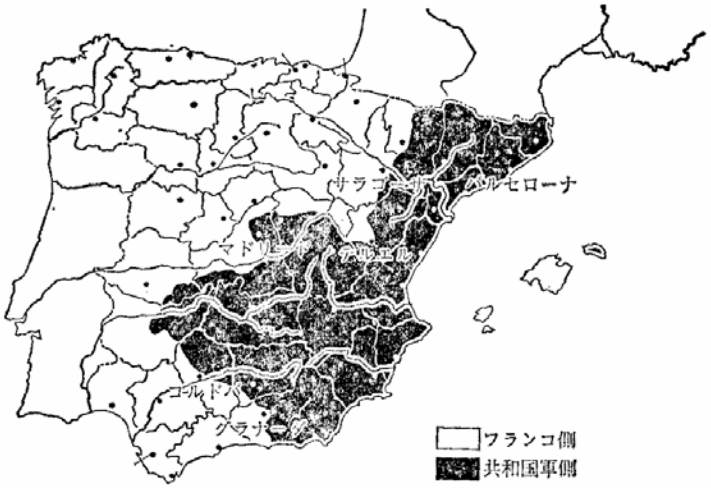


（出所）M. Tuñón de Lara (dir.), *Historia de España*, Tomo IX, Barcelona, 1981, p. 262.
M. Tuñón de Lara (ed.), *La guerra civil española, 50 años después*, 2ª ed., Madrid, 1986, p. 69.

戦　局②（1936年11月）

（出所）M. Tuñón de Lara (ed.), *op. cit.*, p. 92.

戦　局③（1937年10月）



（出所）M. Tuñón de Lara (ed.), *op. cit.*, p. 141.

戦　局④（1938年7月）

（出所）M. Tuñón de Lara (ed.), *op. cit.*, p. 166.

1. クーデタの失敗と内戦の勃発

- 1936年7月18日～19日、スペイン本土各地で**反乱**が起こる。
- カサレス首相は辞任、続くマルティネス・バリオ首相も反乱具との和解に失敗して辞任。
- 続くヒラル首相が労働者への武器配布を認め、反乱軍と戦う姿勢を見せる。
- 1936年3月20日、マドリードの反乱を、政府軍部隊、治安部隊、武装労働者が鎮圧する。

⇒クーデタは失敗に終わり、スペインは二分された。

反乱側vs.共和国側

〔戦局の推移①1936年7月――おおむね共和国側が鉱工業・都市部を、反乱側が農村部を支配した。〕

- モロッコ軍を指揮するフランコ
  - ヒトラーとムッソリーニからの航空機の援助をえて、部隊を本土に輸送
  - サラザール独裁下のポルトガルは、南から進撃する**モロッコ軍**に中央部とつなぐ回廊を提供
- 共和国政府
  - フランスに武器売却を求めるが、右翼・資本家の反対によりフランス人民戦線政府はこれを拒む。
- **不干渉政策**
  - 英・仏、独・伊・ポルトガル、ソ連など27カ国は、9月初め、ロンドンに不干渉委員会を設置。

    →反乱軍支援を阻止できず。

    →不干渉協定は、革命と戦争をスペインに封じ込めることが目的であった。

    ※ファシズム台頭と世界戦争の危機のなか、スペインは**国際政治**に巻き込まれていた。

    →この政策は、共和国に打撃となる。

2. 両陣営における戦争体制の構築

〇反乱側

- 内戦勃発直後に防衛評議会を設置
- 9月末、防衛評議会で**フランコ**が総司令官と政府首班に指名される。→戦争体制確立への歩み
- 政府機能をもつ**国家専門評議会**が設置される。

  ※独・伊とのパイプを独占し、モロッコ軍を指揮→フランコが最高指導者

  -8月半ば、モロッコ軍はバダホスを占領、首都へ進撃

  -9月末、包囲されたトレードの反乱軍を救出して名声を高める。
- カトリック教会の役割
  - 反乱軍を秩序・祖国・カトリシズム防衛の「十字軍」と評価
  - 1937年7月、司教団司牧書簡
  - 1938年6月、ローマ教皇庁によるフランコ政権承認

    —→カトリック教育、聖職禄の復活

- 1936年10月19日、首都総攻撃を指令

〇共和国側

- 連携を欠く民兵、協力関係をもたない各地方の評議会
- 1936年9月初め、ラルゴ・カバリェーロ内閣の成立
  - −軍隊と国家機構の再建
  - −諸政党・諸勢力の入閣
  - −市町村の革命委員会を市町村庁に再編
  - −政治委員（コミサリオ）制を導入、**人民軍**を再建
  - −**人民裁判所**の設置
    - →無軌道なテロ行為の減少
  - −10月初めに議会が機能を回復
  - −**バスク自治憲章**を可決、バスク・ナショナリストの協力を確保する。
  - −10月、反乱支持者の土地の国有化と農民への貸与を決めた政令

※内戦後の革命を承認しつつ、共和国の法的枠組みにおさめようとするもの

＝「**革命防止のための（反乱軍の）クーデタが、革命を引き起こした。**」

→経営の労働者管理、農業の集団化、貨幣の廃止

3. 1936年10月～1937年3月――マドリード攻防戦

- 1936年10月～、**マドリード攻防戦**
  - 独・伊の反乱軍への援助の拡大
    - →11月18日、両国はフランコ政権を承認
    - →空軍部隊「コンドル兵団」
    - →イタリア地上軍部隊「義勇兵団」
  - 共和国への**ソ連の援助**の開始
    - →反ファシズムの盟主
    - →スペイン連帯運動、ソ連国内の士気高揚
    - ※ソ連の支援は、英・仏の態度を硬化させる。
  - **国際義勇兵**の共和国支援
    - ※ファシズム対反ファシズムの戦い。「スペインを救え」

〔戦局の推移②1936年11月――南部と中央部の反乱軍がつながり、反乱軍はマドリード攻撃に移った。〕

- 1936年11月初旬、共和国政府は**バレンシア**に移転
  - 危機に瀕したマドリードだが、猛攻に耐える。
  - 11月下旬、フランコは総攻撃を断念。
    - →マドリードを孤立させる作戦に変更
  - 12月～翌年1月、コルーニャ街道をめぐる戦闘
  - 37年2月、ハラーマ川の戦い
  - 37年3月、グアダラハーラの戦い

4. 1937年4月～1938年4月――長期戦・消耗戦

- 1937年春、フランコは攻撃の矛先を北部に変える。
  - 3月末～、バスク攻撃
  - 4月26日、コンドル兵団とイタリア空軍によるゲルニカ爆撃
    ※ピカソの絵「ゲルニカ」
  - 6月中旬にビルバオ、8月下旬にサンタンデール、10月21日にヒホンを占領、北部全域を制圧。

- 共和国側の攻勢
  - 7月初め、ブルネーテでの攻勢
  - 8月下旬、サラゴーサ攻略作戦。ベルチーテの占領。

※戦局は、共和国側に不利になる。

〔戦局の推移③1937年10月――フランコ軍は北部全域を制圧した。〕

5. ネグリン政府

- 長期戦⇒戦争体制の拡充を迫る。
- 政党間の対立。焦点となった**カタルーニャ**
  - CNT　vs. アスケーラ、PSUC
  - POUM　vs.　共産党
  - 1937年5月初め、バルセローナでCNT・POUMと治安部隊・PSUCとの武力衝突

  ⇒1週間で約500名の死者。「**5月事件**」
  - この事件後、カタルーニャの軍事と治安は中央政府に移管される。
  - 事件の責任追及をめぐって共産党とラルゴ首相の対立
- アサーニャ大統領は、社会労働党の**ネグリン**に組閣を命じる。
- 1937年8月半ば、アラゴン評議会を解散
- 10月末、共和国政府をバルセローナに移転
  - カタルーニャの軍需工業の統制を強化
  - **共産党**と協力して政策を推進

※共産党は、ソ連の威信を利用して、組織を拡大

- 1937年12月中旬、テルエル攻略作戦の開始
  →低下した士気の高揚、マドリードの側面支援
  -38年1月初めにテルエルを占領、2月下旬には奪回される。
  ※共和国の消耗は激しくなる。

- 1938年3月初め、フランコ軍はアラゴンを席巻
- 4月15日、地中海に到達し、共和国を二分する。
  →共和国政府内に失望感が広がる。

6. フランコの新国家

- フランコは、内戦後を見据えて、戦争体制を拡充
- CEDAの後退、カルリスタとファランヘが発言力を強める。
- 軍の主導権。
- 1937年4月19日、**政党統一令**
  →フランコを党首とする「伝統主義とJONSのファランヘ」
  →それ以外の政党を禁じる。
  ※新国家は、統一党に基づく**全体主義国家**であると宣言。
  –独・伊の支援→ファシズム色を強める。
- フランコは、軍、政府、党を掌握。新国家の**個人独裁**の様相。

- 1937年11月、イギリスから事実上の政権承認をとりつける。
- 1938年1月、最初の内閣の組織。
- 1938年3月、**労働憲章**の制定
  ※新国家の目標＝**反資本主義、反マルクス主義、カトリシズムの社会主義**
  ⇒労資協調的「**垂直組合**」の組織化
  ※ムッソリーニの「労働憲章」の影響、カトリシズムの原理。

7. 1938年5月～11月――共和国側の抵抗

- ネグリンによる**和平の道の模索**
  - 1938年5月、13項目綱領の発表
  - 英・仏もフランコも提案に反応せず。

- 1938年8月中旬、アスケーラとバスク・ナショナリスト党が内閣から脱退

- ネグリンに残された唯一の道＝**世界戦争勃発までの抵抗**

  –1938年3月、ドイツのオーストリア併合

  –1938年7月下旬、エブロ川での大規模な攻勢

  →8月初めに戦線は膠着、11月半ばに撤退

  〔戦局の推移④1938年7月――共和国側は戦争継続能力を内外に示すべく、エブロ川渡河作戦を試みた。〕

- 1938年9月、**ミュンヘン会談**。英・仏の対独宥和政策の継続。

  →世界戦争は遠のく。

- 1938年10月末～、国際旅団の解散

  ※内戦終了5ヵ月後に、世界戦争（第二次世界大戦）が始まった。

8. 1938年12月～1939年4月――スペイン内戦の終結

- 1938年12月下旬、フランコはカタルーニャ攻撃を開始
- 1939年1月26日、**バルセローナの陥落**
- フィゲーラスで開催の議会は、スペインの主権保障、国民投票による政体決定、無報復の和平三条件をフランコに提示

　→まったく無駄であった。

1939年2月11日、約40万人が国境を越えてフランスに入る。

- 2月27日、英・仏がフランコ政権を承認。アサーニャ大統領は辞任する。
- 3月5日、マドリードで中央部方面軍司令官カサードのクーデタ、反ネグリン・反共産党諸派からなる**防衛評議会**を結成。

　→ネグリンや共産党指導者は出国

- フランコはあくまで無条件降伏を求める。

　→3月28日、フランコ軍は抵抗なしにマドリードに進駐

- 1939年**4月1日**、フランコの勝利宣言。

「本日、アカの軍隊を捕虜とし武装解除した。国民軍は最後の目標を達成した。戦争は終わったのだ。」

　⇒フランコ独裁の到来